

平成 30 年度 文部科学省委託事業  
有害環境から子どもを守るための推進体制の構築  
(青少年安心ネット・ワークショップ)

平成 30 年度  
「ケータイ・スマホアンケート」及び  
「インターネット夢中度調査」結果



公益財団法人 兵庫県青少年本部



## 「ケータイ・スマホアンケート」及び「インターネット夢中度調査」結果

兵庫県では平成 27 年度より実施している、県内約 4,400 人の小・中・高校生を対象とした、日常のインターネット利用やその夢中度（依存度）を調査するアンケートを、今年度も下記のとおり実施しました。

※アンケートは、日常の携帯電話の使用等に関する質問項目のケータイ・スマホアンケートと、アメリカのヤング博士が開発した 8 項目の【Diagnostic Questionnaire for Internet Addiction(DQ), Young K, 1998】をインターネット夢中度アンケートとして実施し、本資料はその結果を集計したものです。このインターネット夢中度アンケートのうち、5 項目以上「はい」と回答した小・中・高校生を「インターネット依存の疑いあり（依存傾向にある）」として計上し、本資料では「依存傾向」と表記しています。

### 1 兵庫県内の小・中・高校生のインターネット依存傾向について

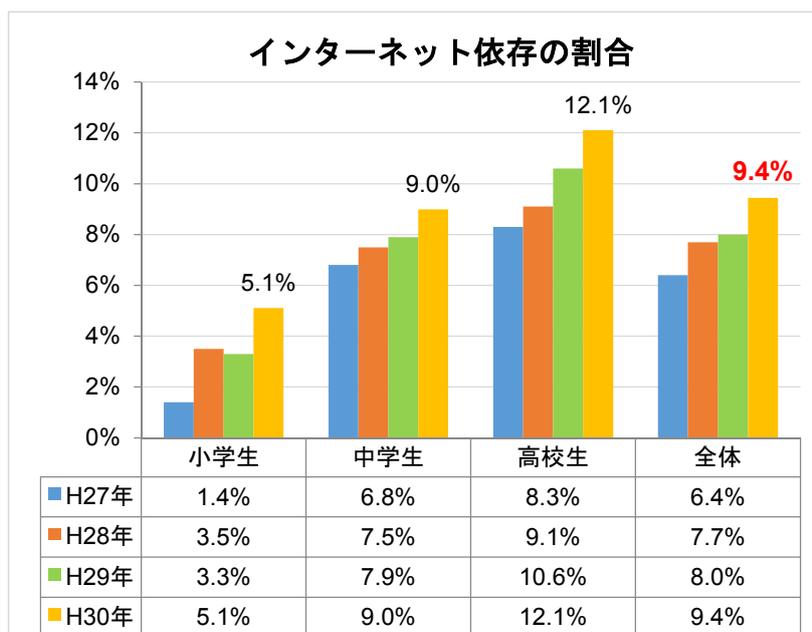
#### (1) インターネット依存傾向の割合

アンケートの結果、小学生 5.1%、中学生 9.0%、高校生 12.1%がインターネット依存傾向にあり、全体では 9.4%の生徒が依存傾向にあることが分かりました。

右のグラフは、依存傾向にある生徒の割合を校種別にまとめたものです。

小・中・高校生いずれも過去 3 年を上回る結果となり、依存傾向にある生徒が徐々に増えていることが分かります。

また、校種が上がるほどインターネット依存の割合が高くなることが分かりました。特に小学生はインターネット依存の割合は低いものの、伸び率が高いことからインターネット依存の低年齢化が進んでいることが読み取れます。このことから、インターネット依存に対するより一層の対策が必要であることがわかります。

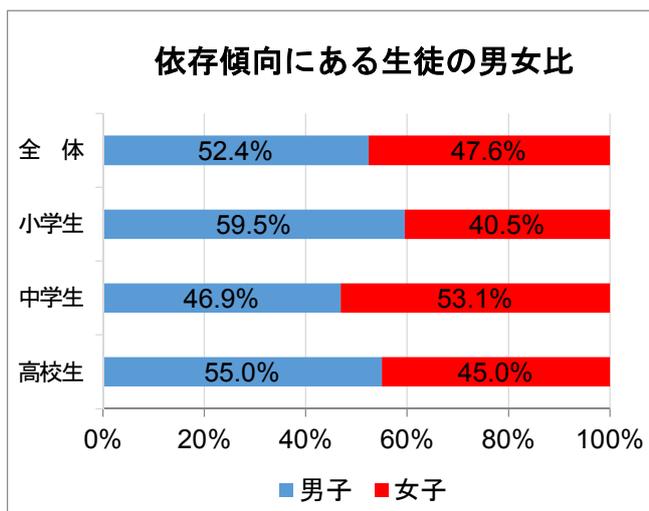


## (2) 依存傾向にある生徒の男女比

右のグラフは、依存傾向にある生徒の男女比です。

全体ではほぼ同じ比率ですが、小学生では男子の占める割合が約6割と多くなっています。「スマホサミット in ひょうご」に向けたワークショップでの聞き取り（以下、「聞き取り」と記載）から、携帯ゲーム機によるインターネット接続が大きな要因の一つとわかってきています。

スマートフォン（以下、「スマホ」と記載）対策だけでなく、スマホ以外のツールへの対策も含めていく必要があると思われます。



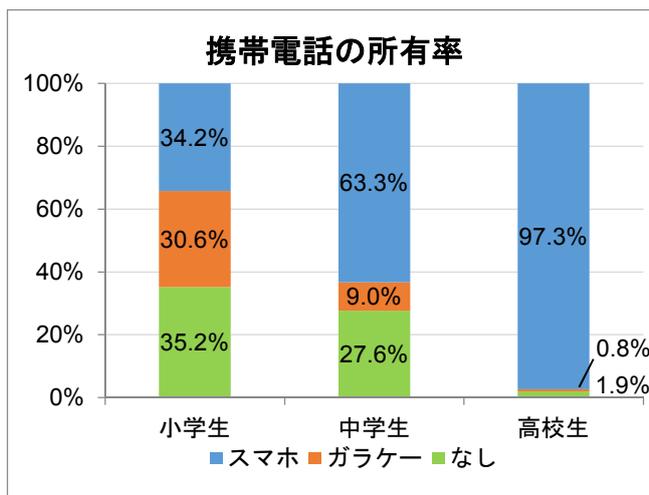
## 2 携帯電話とインターネット接続端末について

### (1) 携帯電話の所有率

右のグラフは、校種別、携帯電話の所有率です。

スマホ所有率は、小学生 34.2%、中学生 63.3%、高校生 97.3%と校種があがると増えることがわかります。

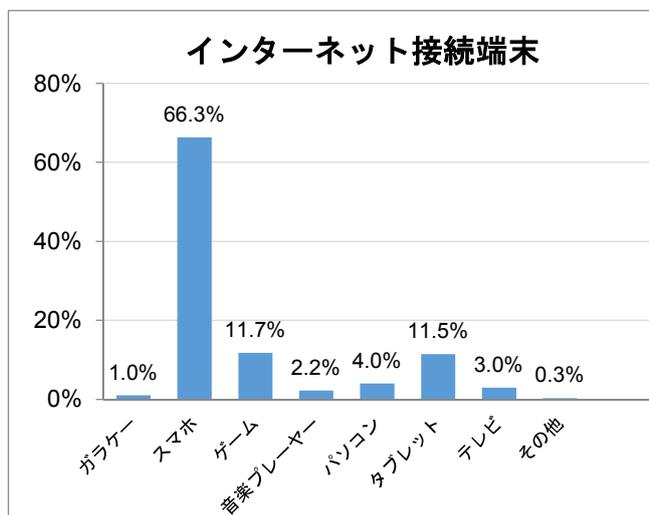
小学生の所有率は64.8（昨年度 57.4）%となり、中でもスマホの所有率が34.2（昨年度 23.6）%と大きく増加しています。ここからも低年齢化が見て取れます。



### (2) インターネット接続端末

右のグラフは、インターネットに接続する時に一番よく使う端末です。

全体としてはスマホが66.3%と最も多いですが、子ども達はスマホだけでなく、ゲーム機（11.7%）やタブレット（11.5%）など、様々な機器からインターネット接続をしていることがわかりました。

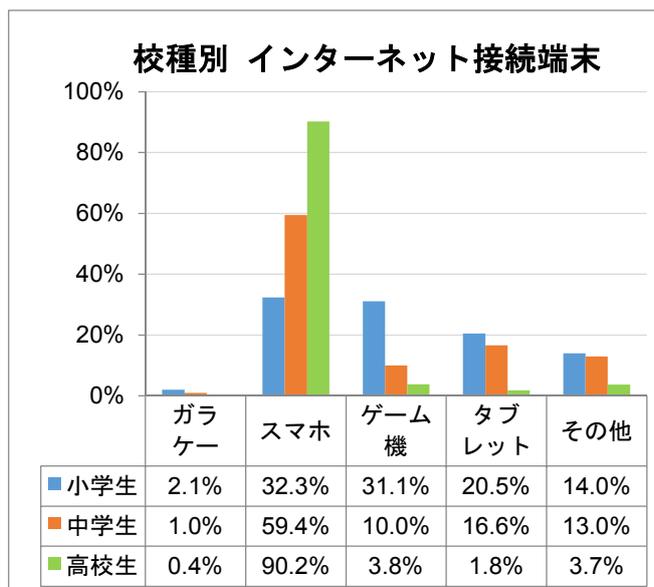


### (3) インターネット接続端末(校種別)

右のグラフは、インターネット接続端末を校種別にまとめたものです。

全体としてスマホが多いですが、小学生はゲーム機、タブレットも多いことがわかりました。聞き取りからは、男子がゲーム機、女子はタブレットという声が多く聞かれました。

スマホを所有する前にこのような機器でインターネット接続をしていることがわかりました。



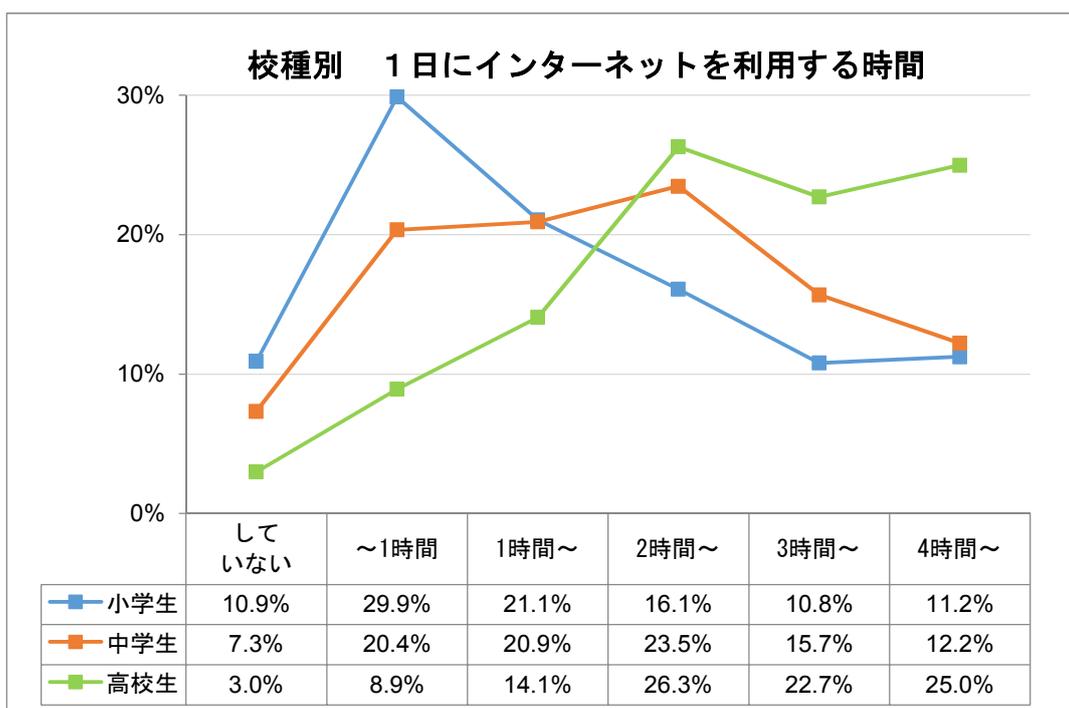
## 3 インターネット利用について

### (1) 1日にインターネットを利用する時間

下のグラフは、1日にインターネットを利用する時間を校種別に示したものです。

3時間以上利用している割合は、小学生22.0(昨年度15.9)%、中学生27.9(28.8)%、高校生47.7(34.4)%と校種が上がるほど利用時間が増える傾向が見て取れます。

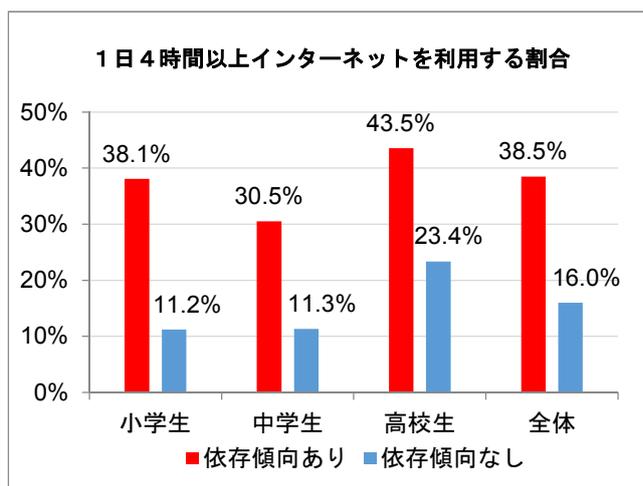
昨年度と比較し、中学生の利用時間があまり増えていないのは、スマホサミット等、一連のインターネット利用対策において中学生が中心となって活動していることも要因として考えられます。一方、小学生と高校生の利用時間は大きく増加しており、今後は、小学校、高校へのさらなる対策が必要と考えられます。



## (2) インターネット利用時間

右のグラフは、1日に4時間以上インターネットを利用する生徒の割合を依存傾向別、校種別に示したものです。

依存傾向にある生徒（以下、「依存傾向あり」と記載）とない生徒を比較すると、依存傾向ありの長時間利用が顕著に表れており、高校生では、依存傾向にない生徒（以下、「依存傾向なし」と記載）の約2倍、小中学生では約3倍となっています。

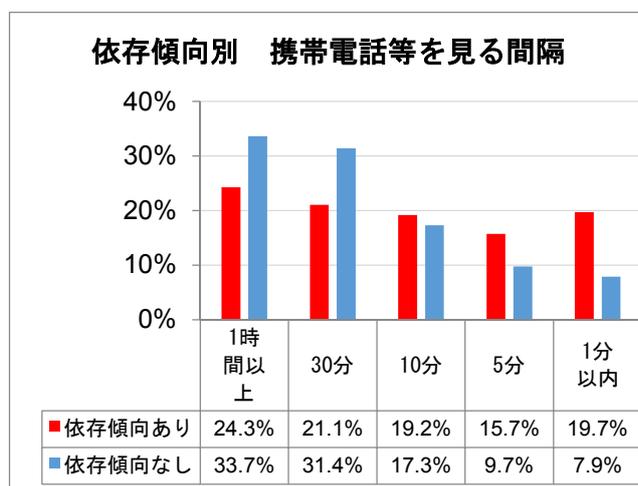


## (3) 携帯電話等を見る間隔（依存傾向別）

右のグラフは、携帯電話等を見る間隔を依存傾向別にまとめたものです。

依存傾向ありでは、1分以内の間隔で携帯電話等を見ている割合が19.7%、5分以内の間隔で見ている割合が35.4%と頻りに携帯電話を見ていることがわかりました。

一方、依存傾向なしでも、5分以内の間隔で見ている割合は17.6%あり、生徒達にとって携帯電話等が日常生活になくてはならないものになってきていることがうかがえます。

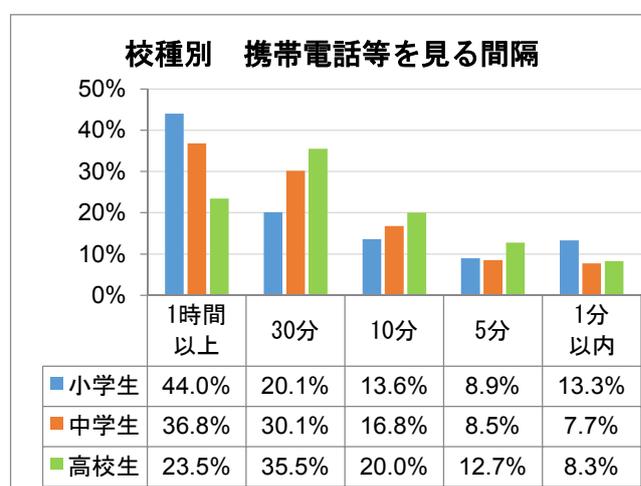


## (4) 携帯電話等を見る間隔（校種別）

右のグラフは、携帯電話等を見る間隔を校種別にまとめたものです。

小学生は1分以内の間隔で携帯電話等を見ている生徒が13.3%います。

日常的に携帯電話等がそばにあり、定期的にチェックするというより、ずっと確認しながら生活している生徒が増えていると考えるべきかもしれません。

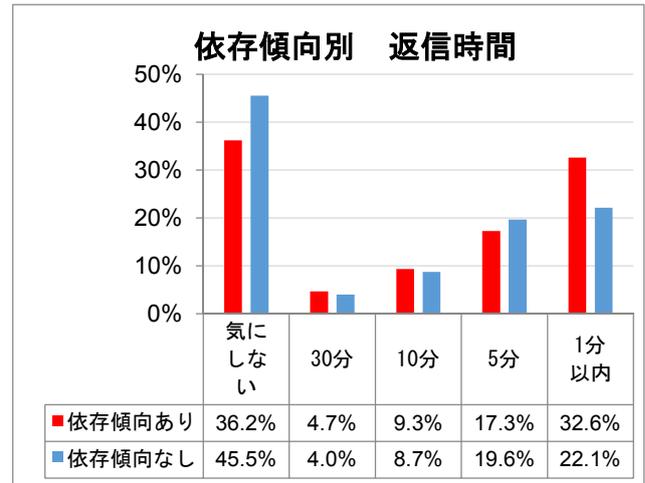


## (5) 返信時間

右のグラフは、「LINEなどで『既読』がついたら、どれくらいで返信しようと思いますか？」への回答を依存傾向別にまとめたものです。

依存傾向ありが早く返信していることがわかりました。特に1分以内に返信する割合は、依存傾向ありの場合32.6%と、依存傾向なしの22.1%を大きく上回っています。

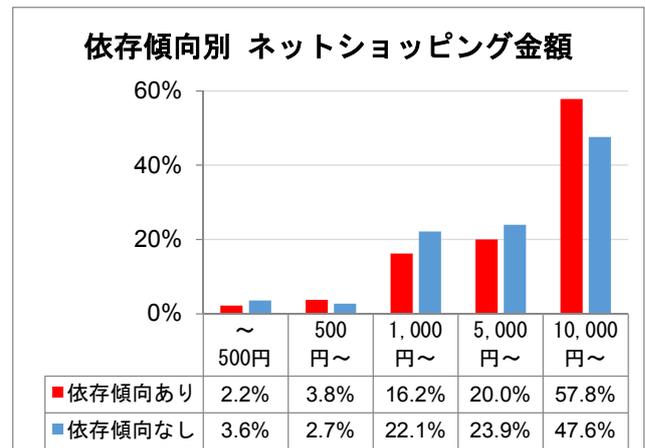
送信してきた相手への気遣いからと考えられ、依存に陥るしくみ解明の参考になるデータと考えられます。



## (6) ネットショッピング金額

右のグラフは、ネットショッピング金額を依存傾向別にまとめたものです。

依存傾向ありの57.8%がこれまでに合計10,000円以上のネットショッピングをしたと答えています。一方、依存傾向なしでも47.6%がこれまでに合計10,000円以上のネットショッピングをしており、生徒達の間ではネットショッピングが一般的になりつつあることがわかります。



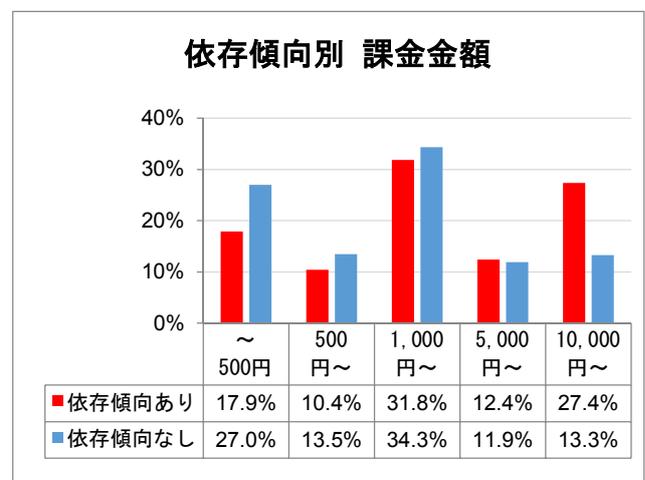
## (7) ゲーム等への課金の金額

右のグラフは、インターネットでゲーム等への課金について、依存傾向別にまとめたものです。

依存傾向ありでは、これまでに合計10,000円以上課金した割合が27.4(昨年度10.9)%、依存傾向なしでも13.3(昨年度3.8)%と高額課金が増えています。

聞き取りによると、生徒自身がプリペイドカードをコンビニ等で購入して課金するケースが多いようでした。

以前は、保護者のクレジットカードを利用することが多かったのが保護者の把握が容易でしたが、最近は課金していること自体、保護者が知らない場合も多いと思われます。



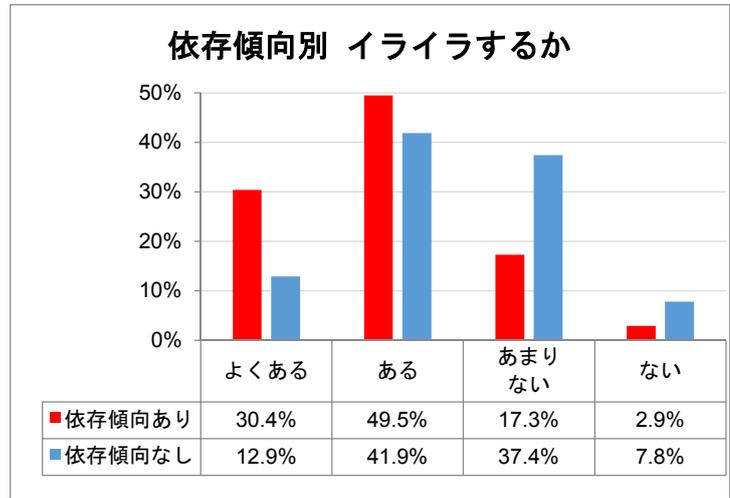
#### 4 インターネット依存と日常生活への影響について

インターネットの利用が日常生活に与える影響について分析しました。インターネットの利用が予想以上に生徒達に影響を与えていることがわかりました。

##### (1) 「イライラするか」

「イライラすることがあるか」という質問に「よくある」と答えた生徒は、依存傾向なしが12.9%に対して、依存傾向ありは30.4%でした。

聞き取りでは、「睡眠不足が原因」「ゲームでうまくいかないから」という意見が多かったですが、「親とケンカになるから」という意見もありました。

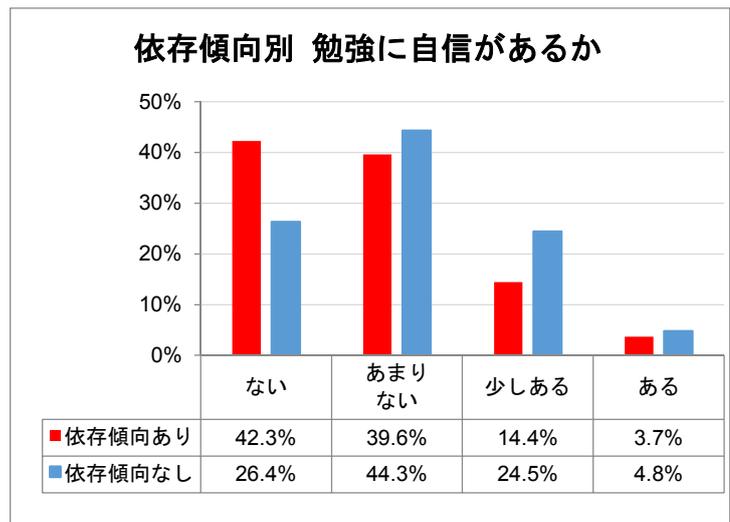


##### (2) 勉強に自信があるか

「勉強に自信があるか」という質問に「自信がない」と答えた生徒は、依存傾向なしの26.4%に対して、依存傾向ありは42.3%でした。

聞き取りでは、「勉強よりゲームに夢中」「勉強していてもスマホが気になる」「そもそも勉強する時間をスマホに使っている」等の声が聞かれました。

生徒達の学習時間や学力への影響は大きいと考えられます。



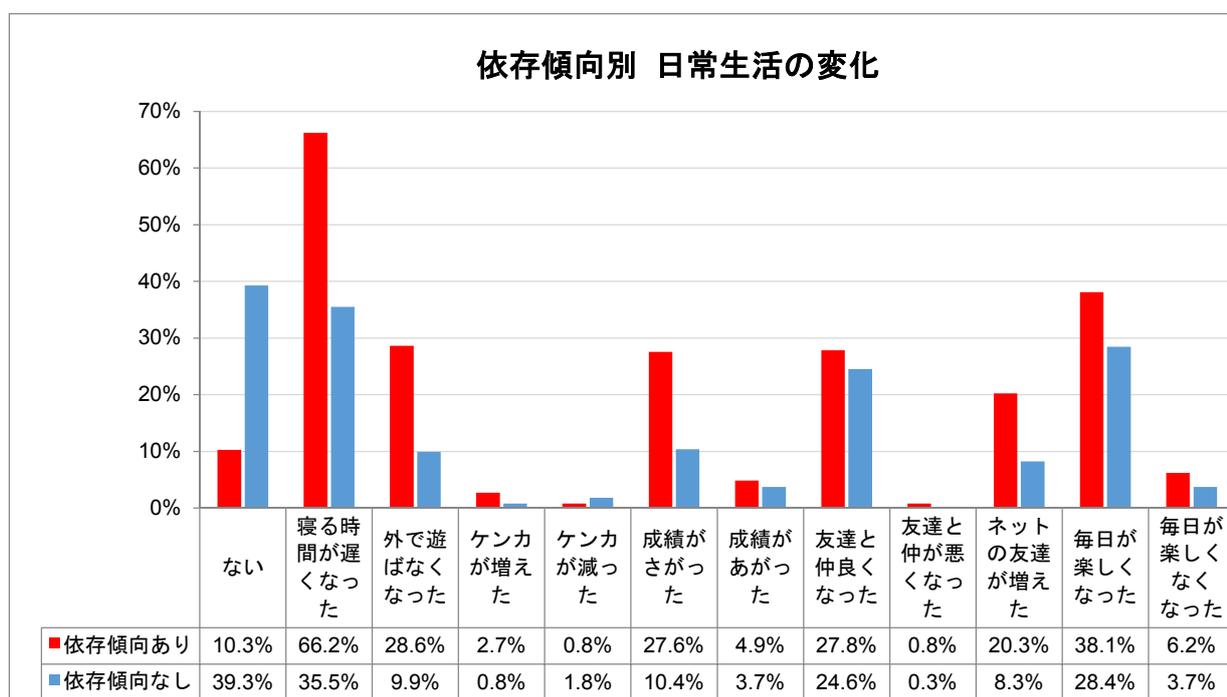
### (3) 日常生活の変化

下のグラフは、携帯電話を利用するようになってからの日常生活での変化を、依存傾向別で比較した結果です（複数回答）。

依存傾向ありでは、「寝る時間が遅くなった」、「外で遊ばなくなった」、「成績がさがった」、「ネットの友達が増えた」、「毎日が楽しくなった」等の回答が、依存傾向なしよりも高い割合となりました。

一方、「(変化が) ない」、「ケンカが減った」との回答は、依存傾向なしの方が依存傾向ありよりも高い割合となりました。

依存傾向ありは、寝る時間が遅くなり、外で遊ばなくなり、成績が悪くなったと否定的な感想を持っている一方、ネットの友達が増え、毎日が楽しくなったと答えています。

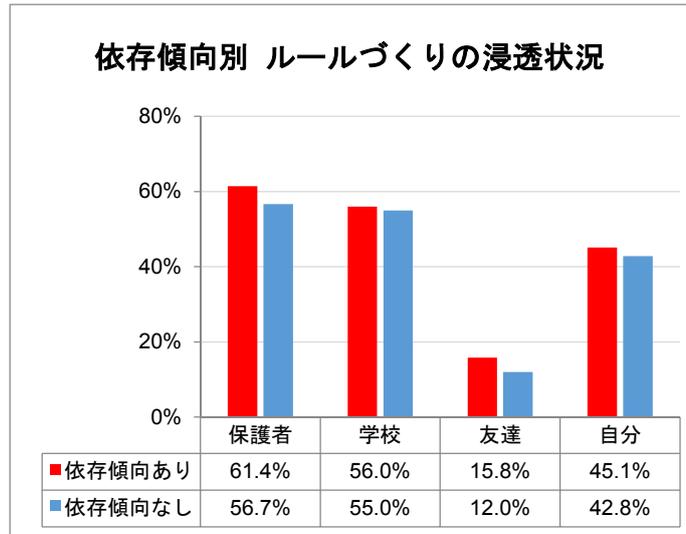


## 5 インターネット利用のルールについて

### (1) ルールづくりの浸透状況(依存傾向別)

右のグラフは、ルールづくりの浸透状況を依存傾向別で比較したものです。昨年度に比べて依存傾向あり、依存傾向なしともに飛躍的に伸びています。

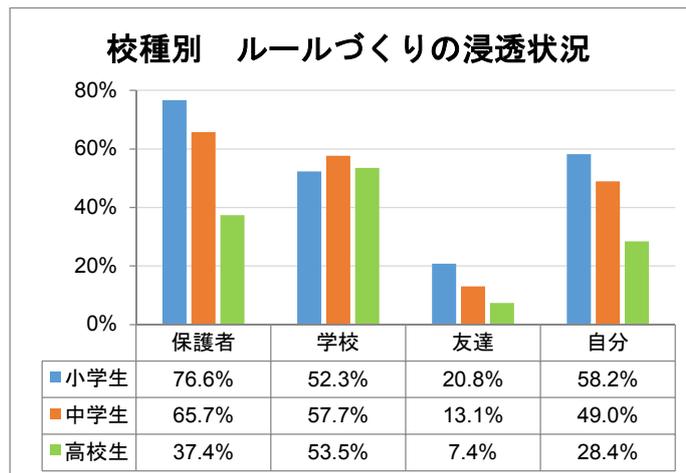
特に「学校」のルールは依存傾向あり 56.0 (昨年度 20.1) %、依存傾向なし 55.0 (23.2) %と倍以上になっています。兵庫県が青少年愛護条例で規定した、子ども自身のルールづくりを支援する取り組みが進んでいるといえます。



### (2) ルールづくりの浸透状況(校種別)

右のグラフは、校種別にルールづくりの浸透状況を表したものです。

校種が上がるにつれ、ルールづくりがなされていない傾向がありますが、「学校」でのルールについては校種による差はなく、兵庫県の取り組みが進んでいるといえます。

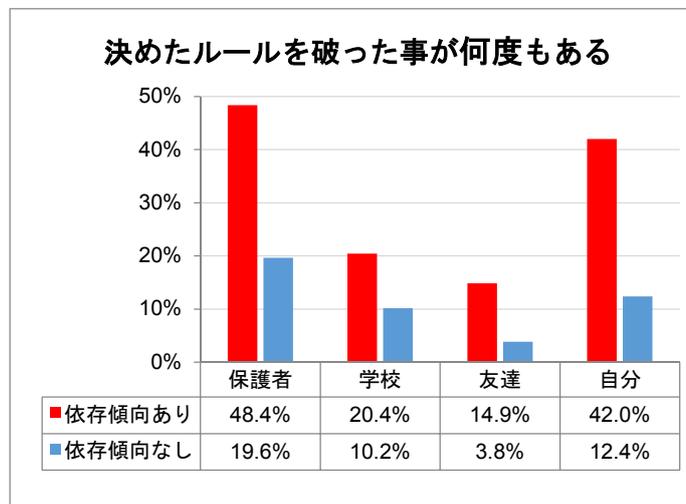


### (3) ルールの順守

右のグラフは、「決めたルールを破ったことが何度もある」と答えた割合です。

依存傾向ありは依存傾向なしに比べて、破ったことがある割合が多いですが、依存傾向ありでは、「学校」「友達」で決めたルールを破ったことがある割合は、「保護者」「自分」で決めたルールの半分以下だということわかります。

「友達」「学校」でのルールづくりを進めていくことが有効と考えます。



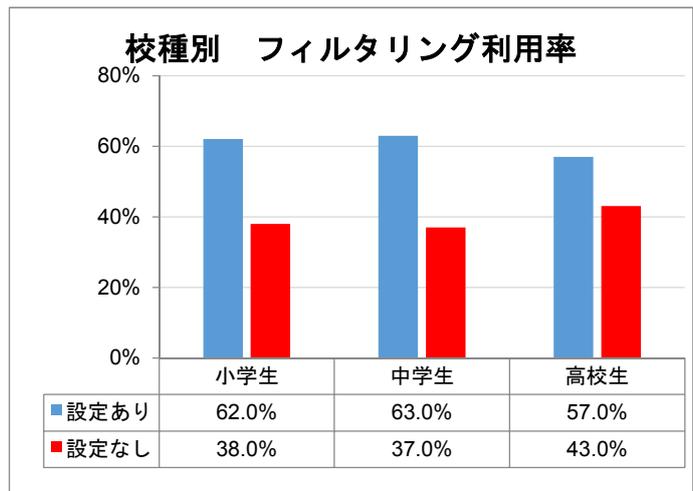
## 6 フィルタリングとインターネットの危険性

### (1) フィルタリングの利用状況

右のグラフは、フィルタリングの利用率を校種別に表したものです。

どの校種も6割前後でした。インターネットの危険から青少年を守るためにもフィルタリングは必要ですが、まだ十分に浸透していないことが分かりました。

ただし、中学生の利用率が63.0(昨年度54.1)%と10ポイント近く上昇しており、取り組みの成果が出ていると考えられます。

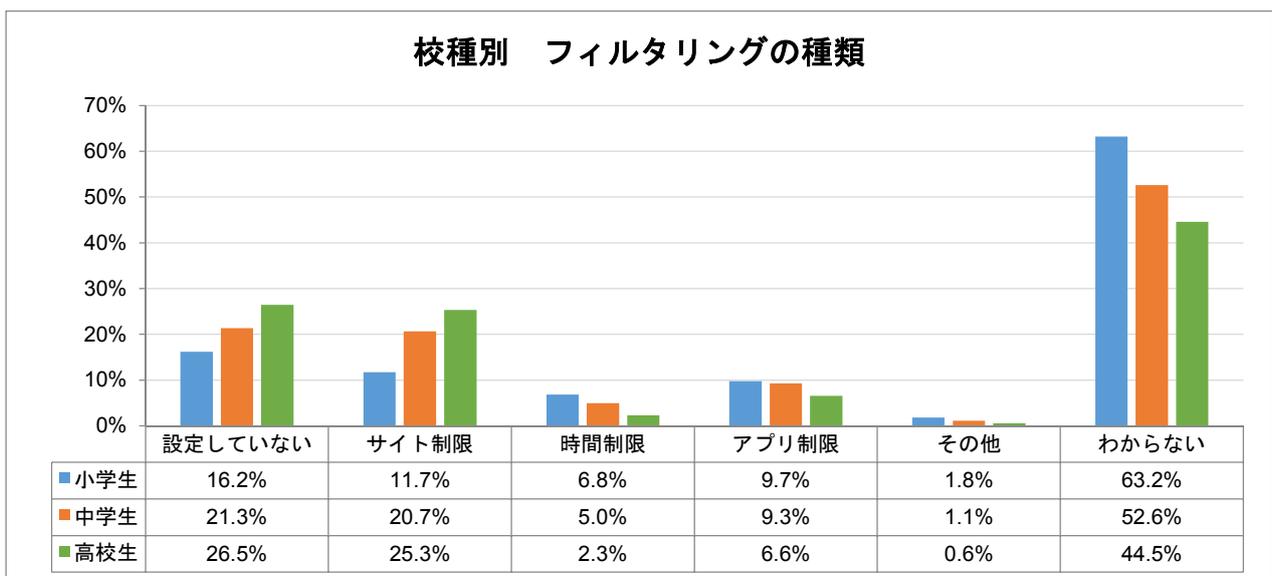


### (2) フィルタリングの種類

下のグラフは、フィルタリングの種類について校種別にまとめたものです。

校種ごとに特徴が出ています。高校生ではサイト制限（出会い系やアダルト等の制限）が多いのに対して、小学生は利用時間制限が多くなっています。子ども達の問題が長時間利用に端を発するものが多くなっていることが要因と思われます。

スマホに時間制限サービスを導入する取り組みなども進んでおり、今後増えていくことが予想されます。なお、フィルタリングの種類がわからないと答えた子どもが多い（小学生63.2%、中学生52.6%、高校生44.5%）ため、このデータだけで考えるのは危険かもしれません。



### (3) インターネットの危険性Ⅰ

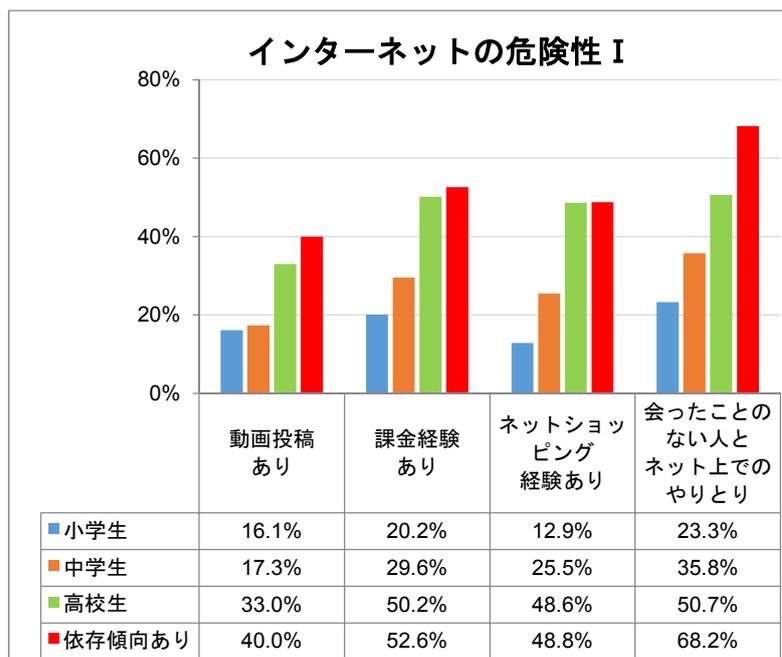
ここからは、インターネットの危険性について見ていきます。

右のグラフは、「動画投稿」「課金」「ネットショッピング」「会ったことがない人とインターネット上でやりとり」をした経験がある生徒の割合を校種別に表し、さらに依存傾向ありと比較したものです。

いずれの項目も、校種が上がるにつれ経験したことがある生徒の割合が増加していることが分かります。

また、依存傾向ありでは、

いずれの項目も全体と比較して割合が高くなっています。最も顕著なのは、「会ったことがない人とインターネット上でやりとり」で、68.2%があると答えています。インターネットでの出会いから多くの事件が起きていることから、危険性の周知は必須です。



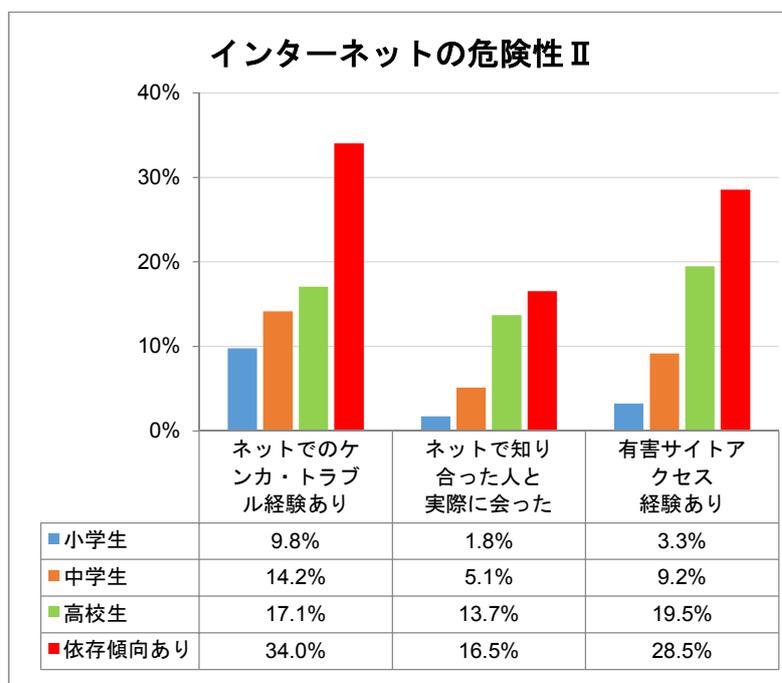
### (4) インターネットの危険性Ⅱ

右のグラフは、インターネット上での「ケンカ・トラブル」「インターネットで知り合った人と実際に会った」「有害サイトへのアクセス」をした経験がある生徒の割合を校種別に表し、さらに依存傾向ありと比較したものです。

依存傾向ありでは「ケンカ・トラブル経験あり」が34.0%います。また、いずれの項目においても、校種が上がるにつれ経験が増加していることが分かります。

この結果からも、依存傾向にある生徒は犯罪に巻き込ま

れる可能性も高くなることが考えられ、インターネット依存は青少年にとって大きな問題であることが分かります。

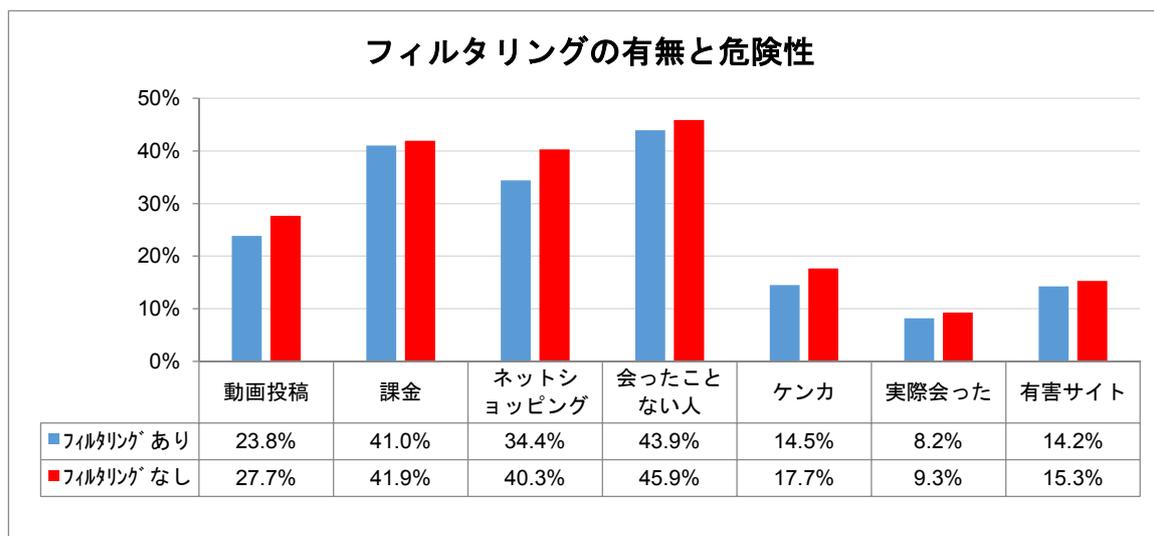


## (5) フィルタリングの有用性

フィルタリングの有用性を調べるため、フィルタリングを設定している生徒としていない生徒で、前述したインターネットの危険性との関連を比較しました。

すべての項目で、フィルタリングを設定している生徒のほうが危険な経験が少ないことがわかりました。フィルタリングは青少年を危険から守る有用性があると言えます。

しかし、インターネットへの接続端末は、携帯電話だけでなく、ゲーム機、パソコン、タブレット、音楽プレーヤーなど多岐にわたっています。そのため、「フィルタリングをしたから安心」とはならないことを理解しておく必要があります。



## 7 子どものインターネット利用状況に関する保護者アンケートの結果

平成30年度より、新たに子どものインターネット利用状況に関するアンケートを、県内約3,000人の保護者を対象に実施しました。アンケート結果からは、子どものインターネット利用状況に関する子どもと保護者の認識の違いがはっきりと現れました。

### (1) 1日にネットを利用する時間

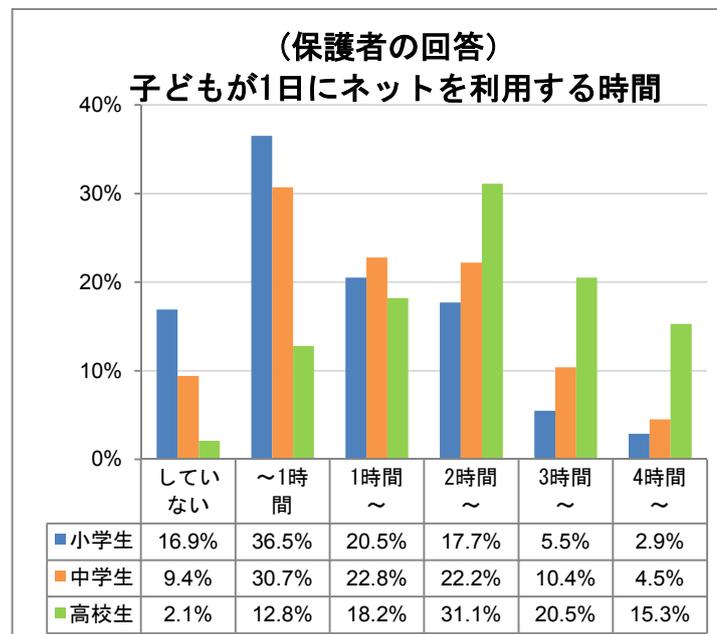
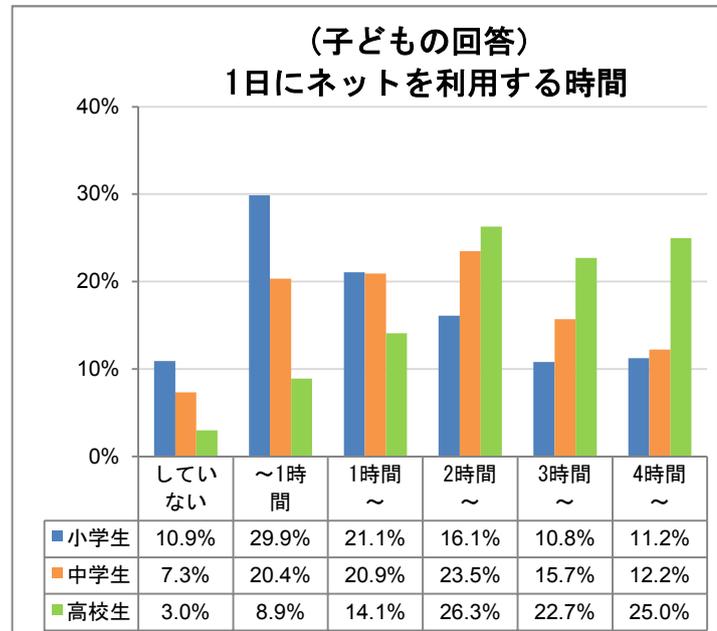
右のグラフは、1日にインターネットを利用する時間について、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

2つのグラフを見比べることで、保護者と子どもの認識が異なることがわかります。例えば「ネット利用4時間以上」と答えている割合で比較してみます。以下、( )内は保護者の割合です。

小学生 11.2 (2.9) %、中学生 12.2 (4.5) %、高校生 25.0 (15.3) %です。特に小学生は4倍近い違いがあります。

もちろん、実際に使っている子ども自身の回答が正しいと考えられるので、保護者が実態を知らないと考えざるをえないでしょう。子どもが隠しているのか、保護者が知ろうとしないのか、このあたりはアンケートだけではわかりませんが、子ども自身がアンケートで答えている結果ですので、隠しているというより、保護者が知らないのだと思われます。

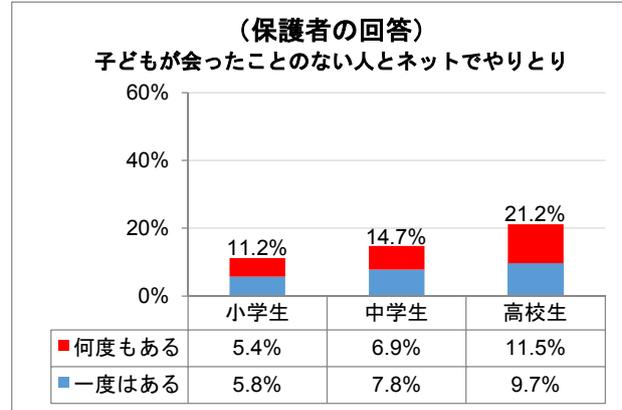
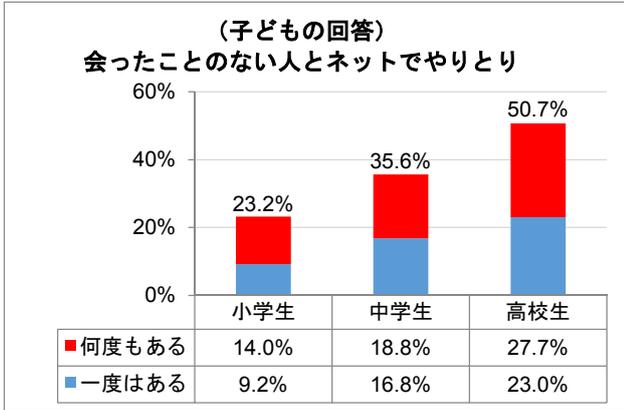
保護者が子どもの利用実態について知ろうとする意識を持つことが大切です。



## (2) 会ったことのない人とネットでやりとり

下のグラフは、子どもが会ったことのない人とネットでのやりとりをしたことがあるかという質問に対し、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

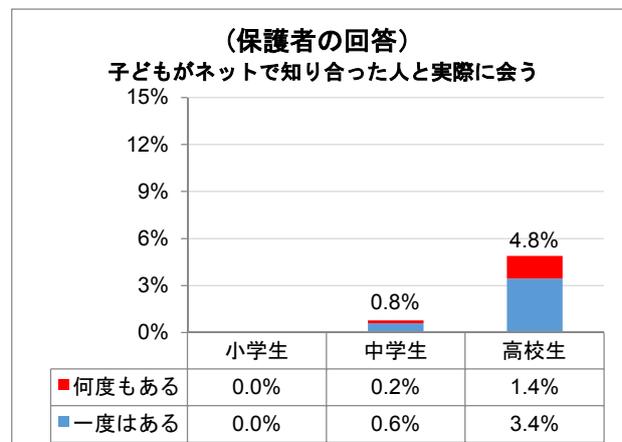
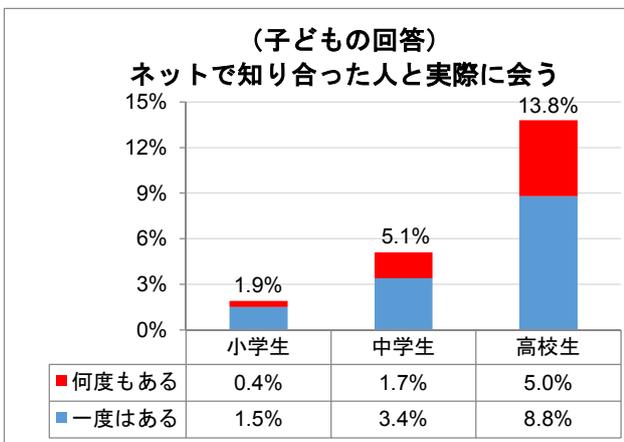
小学生 23.2 (11.2) %、中学生 35.6 (14.7) %、高校生 50.7 (21.2) %と、どの校種も2倍以上、子どもの方が多いです。子どもがスマホ等で何をしているのか保護者が把握できていないことがよくわかる結果です。



## (3) ネットで知り合った人と実際に会う

下のグラフは、子どもがネットで知り合った人と実際に会ったことがあるかについて、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

小学生 1.9 (0.0) %、中学生 5.1 (0.8) %、高校生 13.8 (4.8) %と、どの校種も保護者が現状を把握していないことがわかります。特に高校生の約14%がネットで知り合った人と会っているにもかかわらず、保護者は約5%しか把握していません。子ども達に聞くと「同じ趣味の人と会う」「好きなバンドのコンサート会場で一緒に盛り上がる」等、悪びれない答えが返ってきます。実際は、私たち大人が考えているほど危険なことではないのかもしれませんが、大きな事件も起こっていますので、まずは大人が知る努力をすることが必要です。

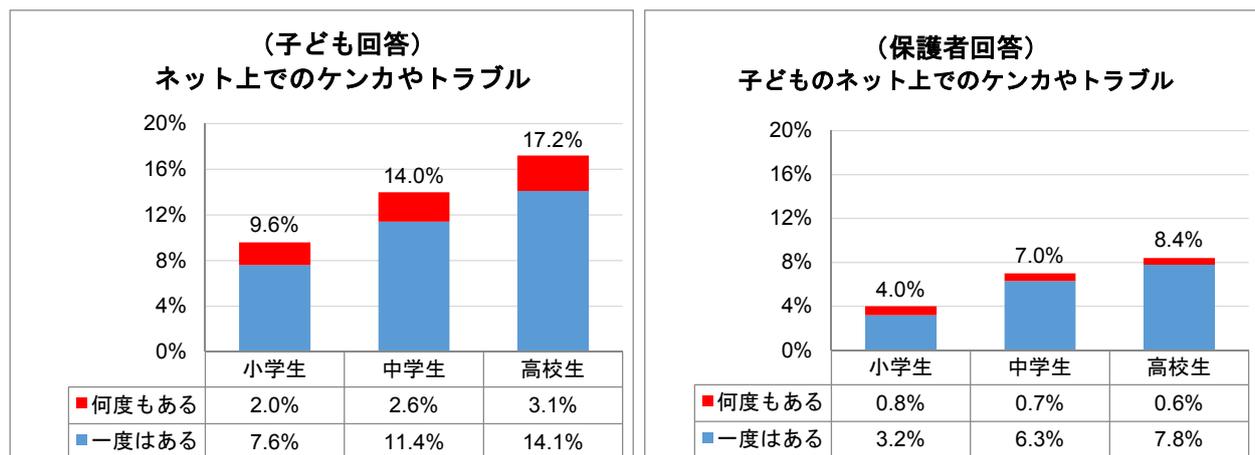


#### (4) ネット上でのケンカやトラブル

下のグラフは、子どもがネット上でのケンカやトラブルになったことがあるかについて、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

小学生 9.6 (4.0) %、中学生 14.0 (7.0) %、高校生 17.2 (8.4) %で、どの校種も保護者の認識は子どもの半分以下です。子ども達は「SNSは文字だけなので、勘違い等でよくトラブルが起きる」「顔が見えないからケンカになりやすい」と言っています。ネット上のトラブルは決して珍しいことではないにもかかわらず、多くが保護者には相談していない可能性が高いことがうかがえます。

大人が知らないことで大きなトラブルに発展することは多いので課題といえます。

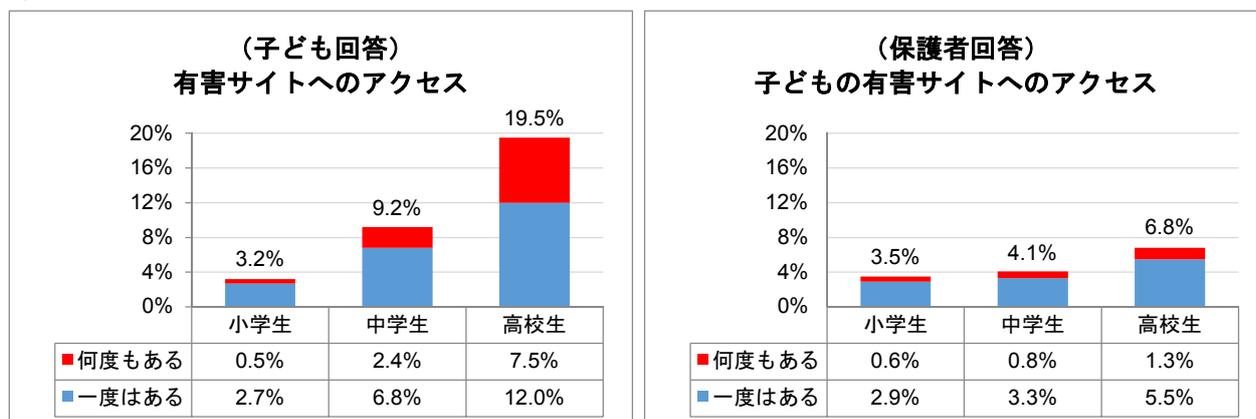


#### (5) 有害サイトへのアクセス

下のグラフは、子どもが有害サイトへアクセスしたことがあるかについて、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

小学生 3.2 (3.5) %、中学生 9.2 (4.1) %、高校生 19.5 (6.8) %で、小学生は、保護者が子どもを上回りましたが、中学生、高校生はこれまでと同じように保護者は子どもの半分以下です。

小学生は保護者の目の届く範囲で利用することが多く、把握がしやすいのでしょうか。ただ、保護者にとって「有害」なサイトを子ども達は「有害」と捉えていない可能性があります。このあたりの認識のズレについても今後注視していく必要があります。

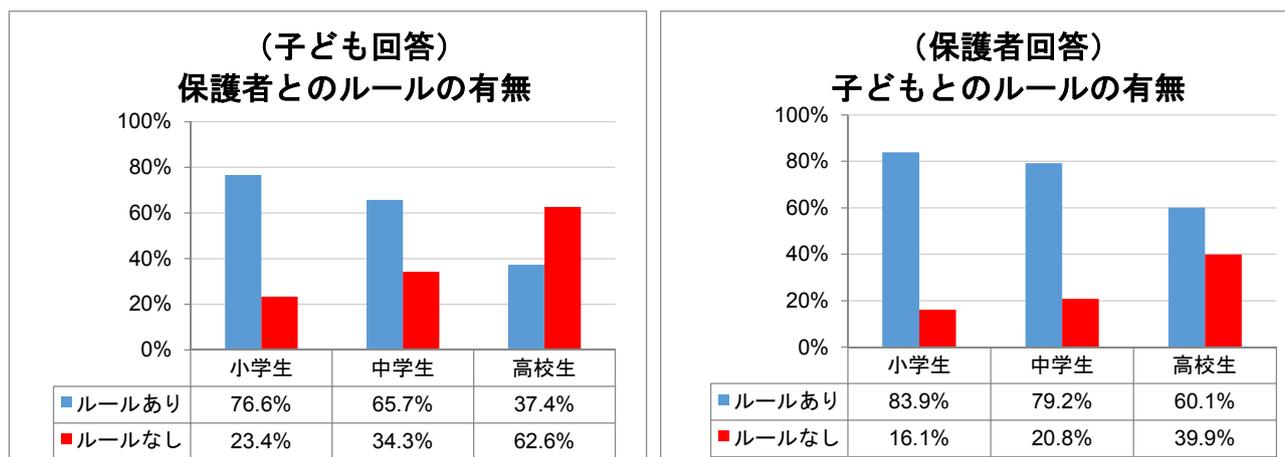


## (6) 保護者とのルールの有無

下のグラフは、子どもと保護者の間でのルールの有無についての回答をまとめたものです。

小学生 76.6 (83.9) %、中学生 65.7 (79.2) %、高校生 37.4 (60.1) %で、「ルールあり」と答えたのは、子どもより保護者の方が多かったです。購入時等に決めたルールがその後も継続していると思っている保護者と、いつの間になし崩し的に「ルールがなくなった」と思ってしまう子どもの差なのかもしれません。

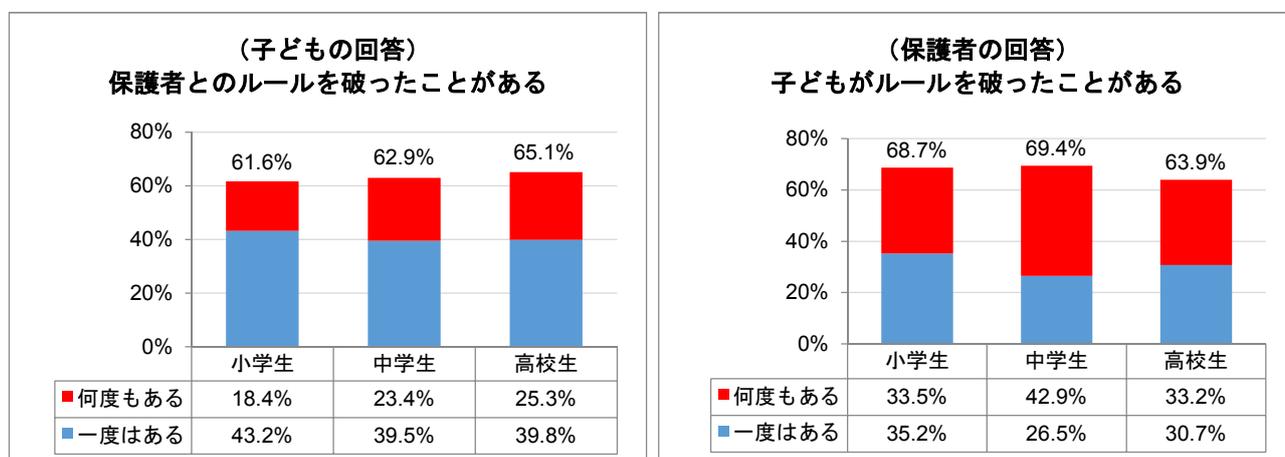
この結果から、親子のルールは一度決めたらそれで良いのではなく、定期的な意識合わせや見直しが必要だとわかります。



## (7) 保護者とのルールの順守

下のグラフは、子どもと保護者の間でのルールを破ったことがあるかについて、子どもと保護者の回答をまとめたものです。

小学生 61.6 (68.7) %、中学生 62.9 (69.4) %、高校生 65.1 (63.9) %と、子ども、保護者ともに6割以上が、「子どもはルールを破ったことがある」と答えています。子ども達に聞くと、「ルールが古くなるから」と答えます。年齢が上がると友達関係や塾等の事情が加わるなど、一度決めたルールでは対応できなくなることがあります。子どもがルールを破ってしまう前に、親子で現状に即したルールに変えていく必要があります。



アンケート結果から見えてきたように、子どもの利用実態を保護者が必ずしも把握できていないことがわかりました。まずは親子でしっかりコミュニケーションを取り、子どもの実態を把握することが必要です。

そのうえで、実態に即したルールをしっかり話し合っ決めていくことが重要です。さらに、ルールは一度決めたら終わりではなく、常に実態に即したものに直していくことも重要です。今後も、社会環境の変化に合わせて、子ども達の利用状況も変化していくと考えられます。そのような時に慌てないように、日頃から親子のコミュニケーションをしっかり取っておく必要があります。その際、大切なことは、インターネットやスマホに限ったコミュニケーションだけではなく、対面によるコミュニケーションを重視することです。



---

分析 一般社団法人ソーシャルメディア研究会

---

## アンケート結果に関するお問合せ

公益財団法人兵庫県青少年本部企画部県民運動担当  
(兵庫県企画県民部女性青少年局青少年課内)

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5-10-1

TEL 078-362-3142

FAX 078-362-3957

E-mail seishonen@pref.hyogo.lg.jp

